或る日の反省

附屬幼稚園　菊池ふじの

新入の子供達を迎へたのが遂こないだだと思つてゐたのに、早やもう第一學期も終らうとしてゐる。今更の樣に心改まる氣持がして來て、どれだけ入園當時と變つて來たかと、事毎に前と比べて見やうとするこの頃である。繪のお帳面を開いて見る。鋏仕事のお帳面を開いて見る、ぬりゑ帳を開いて見る。どれを見ても、誰のを見ても、ほんの少しづゝではあるが、上達と言はふか、まとまりと言はうか、細かさと言はふかそう言つた渾然とした或進歩が認められて來てる。やはり、教育と言ふものは、せつかちに焦つて見た所で、お藥が效く樣には速效はないものだが、自然に、時が、こちらの努力と相俟つて、效果をじり〳〵と現はしてくれるものだなと又つく〴〵と感じ入つて見るのである。

こんなわけで、遊戯にも唱歌にも、或まとまり、落ちつきが出來て、大體はこちらの思ふ樣になりかけて來てゐるのである。

つひ三四日前の事であつた。唱歌を唱歌として、出來るだけ立派に歌ふ樣にしたいと思つて、いつもの樣に席を作つて幼兒達みんなを席に就けた。所々に實習生の方達もは入つた。實習科の方は、團體で何かをする時は、自己統制の力が弱く、ぢきあきて來るか、初めから注意散慢で集中が出來ず、そればかりか、その餘波を他の子供にも及ぼして邪魔をし勝ちな幼兒の、隣の席に就いてもらふのが常である。

この日も實習科生のK先生は、勇ちやんと言ふ子の傍の席に就いた。

勇ちやんは一寸變つた子供である。まあ、ざつとこんな子供だつた。

一寸もぢつとしてはゐない。いつも、小刻みな足ごりでちよこ〳〵と駈けて歩く。ごつしりと歩くことはない。遊戯の時、ピアノに合せてと言ふと、兩手がぶつ飛んでいく位にふつて、バタ〳〵と大きな足音を立てゝ歩く、リズムにはごうもあはない。

お話をきいてゐても、仕事をしてゐても、時々誠に頓狂な大聲を出してキャーツと言ふ。

人にしつこく〳〵つきまとふ。他の兒と話す時でも、又は何か聞く時でも、その子の頸に自分の手を廻して下から覗き込む樣な恰好をして、大きな、とても大きな聲で話す。誰にでも終始つき當つたり、顏と顏とすり合ふ位に近づけてものを言つたりする。

廊下を歩く時は、いや廊下を歩く時ばかりでなく、外で遊んでゐる時でも、又はお室で含嗽をしに流元までゆく時でも、極めて大きな頓狂な聲でぶう〳〵と言つて電車になつたつもりで歩く。そして途中で子供に出會へば、どしんと突き當り、實習科の方達に會へば、自分の知る先生、知らぬ先生に拘はらず、いかにもなれ〳〵しく、はたから見ると、幼稚園で關係はなくとも、家庭同志がよく知り合つてでもゐるのかと思はれる程になれ〳〵しく、若い先生方の前に戯れる。若い先生方も思ひがけぬ子から、いかにも人なつこく慕はれた愛らしさに、これもまたにこやかに二言三言言交はして過ぎ去る樣子なのに、こちらから見て居た私、遂、「このお子さんとお知り合ひなの？」と聞いて見た事が一再ならずあるのである。

それからもつとある。普通の子なら、「林の組お辨當！林の組お辨當！」と言ふ聲でも聞え樣ものなら、何をさておいても泥手を拭き〳〵は入つて來るのが普通であるのに、この勇ちやんに限つては、どうしたつて這入つて來ない。ブランコにへたばりついてゐたり、お砂場に一人殘つてゐたり、大きい組の遊ぶのに見入つてゐたりしてどうしてもは入つて來やうとはしない。私が行つて、お手々を引つ張つて來るか、力のありそうな子供が行つて連れて來なければ來ないのである。お辨當の時ばかりでなく、お仕事で這入

らうとする時も、又はお歸りの時でもそう。凡ての出入に誠に手間取れて、他の子供までが勇ちやんを、みんなと一緒にする爲に奔走する有樣なのである。

勇ちやんはまた泣かない子供である。先日も、みんなのお家ごつこに「入れてね」と言はずに默つて這入つたのが惡いと言ふわけで、そこに敷いてあつた蓆をみんなで勇ちやんに被せていぢめてゐた。いつもベソばかりかいて先生の袖にぶら下つて歩いてゐる意久地なしの悟ちやんまでが、威張つてやるのはこの時、とでも思ふのであらうか、勇ちやんの髮の毛を引つ張る。他の子供は體中のそちこちを叩くと言つたわけで、みんなが寄つてたかつていぢめてゐるのに、泣かないで、ケロリとした顏をしてゐる。みんなの仕打がひどくなつた所で初めて、

「先生！　これ！　先生これ！」と極めて悠々と私に向つて悲鳴をあげると言ふ有樣。

お砂場等で遊んでゐる時も、勇ちやんの使つて居る積木を他の子供が取つて行つても、普通の子供なら直ぐむきになつて一戰交するところを、勇ちやんは、この時もまた

「先生、先生、積木取つて行つた！」

と悠々と悲鳴を揚げるだけなのである。

こんなにされても勇ちやんはみんなと一緒に遊び度いのである。或日も、勇ちやんは線路を破すからいや！トンネルを潰すからいや！、と言つてみんなに排斥されるのを、そんな事は決してしないと云ふ約束をして、どうにかこうにか賴みこんで砂場遊びに入れて貰つた。勇ちやんは威勢よく、砂場の中を、ブー〳〵と言ひながら積木の電車を走らして駈け廻つてゐた。やがての事、そつちからもこつちからも苦情が出て來た。

「先生、勇ちやん僕の作つた線路、踏み壞したの」

「先生、勇ちやん、僕の車庫の電車持つて行つたの」

「勇ちやん、僕の川を潰したの」

勇ちやんにはまた非常に神經質な一面がある。

勇ちやんはお辨當の時お湯を呑まない。「お湯がいやならお水を上げませう」と言つて見るけれども、頭をふつて注いで貰ふことを拒絕する。バスケットの中には瀨戸引きの

湯呑みがちやんとは入つてゐるのである。二三日しても、四五日經つてもちつとも呑まない。元來なら、子供は水を欲しがるものなのに、と不審を抱いて、或る日、お附添の方に

「勇ちやんはどうしてお湯を召し上らないのでせう。」

と伺つた。お附添の方は、「やはりいたゞきませんか」と言はれて、實はあの子は大變に神經質で、家に居りましても瀬戸引きのお茶碗では、金盥の樣でいやだと言つて、決して呑まないのでございます。と語られた。「それではちつとも構ひませんから、どうかお好きなお茶碗を持たせて上げて下さい」と言つたのであつたが、その後、勇ちやんは、深い瀬戸のお湯呑みを持つて來る。

「お湯もいたゞかなければ大きくなりませんよ」

と云つて注いであげると、この頃は毎日呑む樣になつた。

神經質だと言ふ證據がも一つある。勇ちやんはお便所に行かなくて困る。お家でもそうなのだそうであるが、構はないでおけば一日おしつこをしないで歸る。お附添の方に伺つたら、どういふものかお便所へは行きたがらなくて困るとの事だつた。二三度ばかり、我慢し切れなくて、大塚の驛まで行つてもらしたり、向ふのお家の近くの驛でもらしたりするそうである。こんな事をきいたので、時々勇ちやんをお便所に誘ふ。けれど誘つた位のお手柔かさでは、聞こえたのか聞こえぬのか分らない樣子をしてゐる。そこでお手々を引つ張つて無理やりに連れて行く、お便所まで行つて「さあしていらつしやい」

と言つてお手々を離すと、其處で突立つて私の顏をニヤと見て動かない。

「早くしていらつしやい」

と言ければど動かない。で又出掛けて行つて用意をして上げて、「早く」と促す。自分の場所ときめてゐるのが空いてゐなければ決して用は便じないのである。

勇ちやんの身の上噺があまりに長くなるがもう一面の話をさせて頂かう。そして私はこの方面に多大の、よき希望を持つのである。

勇ちやんは電車、自動車等の乘物と、庭の草花等については、他の子供の及ばない、旺盛な興味と知識慾を持つ。

電車、自動車等を好んで描くのであるが、描きながら獨り言ともつかず、私にともつかず語られる話をきいてゐると、私共等及ばない知識を持つて居り、疑問を持つのである。

草花についても、非常に興味を持つてゐる。毎朝の水やりは喜んでする。そして、そこに生えてゐる小さな雜草をも見落さずに、「これ何の花」と聞くのである。夏コスモスが一輪咲いてゐた所、「先生コスモスが咲いたわね」と言ひ、蟲取なでしこだの、デージーだの、鳳仙花だのと、咲いてゐるお花の名をすら〳〵言ふのであるが、大抵のお花の名は知つてゐる。そしてお花を欲しがる。雜草は取つても構はないと言ふと、

「これも取つていゝ？これも取つていゝ？」

と言つて、澤山お手々に握つて、お家へ着いても大事にしてコップに插しておくと言ふ。

誠にやさしい、又極めて小心な一面も見られるのである。

扨て、話は、唱歌をしようとしたあそこの場面にもどらう。

K先生の隣が勇ちやん、勇ちやんのお隣りには小百合ちやんと云ふ女の子が座つた。勇ちやんは、例によつて、小百合ちやんの頸に右手をかけて、物言ふでもなく、小百合ちやんの顏を下から覗く樣な樣子をして顏を近寄せる。小百合ちやんは明らかに嫌だと云ふ表情をして勇ちやんの手を拂ひ除け樣とするけれど、手を離さない。小百合ちやんは少しでも離れ樣として席を動かうとするけれども、勇ちやんは小百合ちやんの動いただけついて行つて、しつこくからまる。K先生は先刻から、勇ちやんにも、みんなと一緒に歌を歌はせ樣となさつて、いろ〳〵にたしなめて居られるけれど一向に聞かない。K先生はたまり兼ねて遂に、小百合ちやんを後ろの空いてる椅子に移した。すると勇ちやんはしつこくもまた小百合ちやんの後をついて行つて、小百合ちやんにからみつく。小百合ちやんは、みんなと一緒に歌はふとするけれどどうしても勇ちやんに邪魔されて歌へない。勇ちやんはてんで唱歌に氣は向いてゐない。K先生も困り拔いていらつしやる。壇の上から、この樣子を見てゐた私は、思はず腹が立つた。常々、あれほどみんな

に嫌はれるからと言つて、人にしつこくからまらない樣にとたしなめておいたのに。それよりも、あんなに小百合ちやんが歌を歌はふとしてゐるのにそれをさせないで、又K先生がさつきからあれ程眞摯に、みんなと一緒にとたしなめて居られるのにと思ふと、思はずカット腹が立つたのである。私はあとの子を實習科の先生方に願つて、勇ちやんを抱つこして、誰も居ない應接室には入つた。こゝで勇ちやんを私の前に立たせ、勇ちやんの兩手をしつかりと握つて、勇ちやんの顏をじつと見た。

「勇ちやん！どうしてあんなにしつこくするの！小百合ちやんがあんなに嫌がつてゐたじやありませんか」

と憤りをそのまゝ表はして言ふと、勇ちやんは、

「先生、僕こんなに立派にしてゐるじやありませんか」

と言ふ。

「今は立派だけど、さつきお唱歌の時、小百合ちやんにおいたをしましたよ」

と私も負けないで言ふ。すると勇ちやんは

「先生、さつき砂場で遊んでゐたら、格ちやんが僕の電車の積木取つて行つたよ」

私「そのお話は今でなく、あとで聞きませう」

と頭を振つて受けつけない。

「先生、こないだ、僕がブランコに乘つてゐたら靖也ちやんが取りかへしたよ」

私「その話も後で」と言つて聞かない。

「先生、僕こんなにお行儀よくしてゐるのにどうしておこるの？」

と言ふ。私は暫く默つてゐて、私の憤りを感じて貰はうとした。勇ちやんも今は默つて、私に手を握られたまゝで立つてゐる。暫くしてから私は、

「勇ちやん、もう嫌ね、あんなにしつこく他の人に邪魔するの嫌よ、分つた？　これからしない？」

と聞いた。それから勇ちやんの手を引いて外庭に出て遊んだ。

私は、勇ちやんをほんとに怒つたりして、果して愛してゐると言へるだらうかと思つた時、淋しさがふと胸をかす

めた。この組を受持つた時に、

「私は、林の組のお母様よ」

と子供にもはつきりと言ひ、自分でも母の心でと誓つてゐたのに、と一寸心を暗くした事であつたが、一歩退いて、これがほんとに自分の子供であつたらどうしたらうかと考へて見て、やはり自分はこうしたらう、もつとひどく叱つたらうと思つて又安堵した。

私は勇ちやんのこのしつこさは、人に嫌がられるからと言つて、いつもたしなめてはゐるのであるが、扨て、勇ちやんは變つて居るには居るが、何處が悪いのだらうと考へて見ても、別に悪い所があるとは思へない。唯、何をしやうとしても皆と一緒に行動して呉れないので、協同生活と云ふ事にはいけないけれども、統御と云ふ事務上の事で手間取れるだけの事で、本質的に悪いとは思へない。大きい組になつても今の勇ちやんの様でゐる人は、今までの永い間まだ見た事がないから、勇ちやんもやがては治るだらうと考へ直して、みんながお話を聽く時でも、お辨當の時でもお歸りの時でも、勇ちやんのするまゝにして置いて見様

とも考へて見た。併し之には、他の子供が承知しない。勇ちやんがまだは入つて來ないと、「勇ちやんは、は入つて來ませんよ」、と注進に來る。さては大勢で押しかけて、勇ちやんを連れて來やうとする。そして、素直に來やうとしないと、みんなは、髪の毛を引つ張つたり、お顔を引つ掻いたりの亂暴を働く。これを抑へて、勇ちやんは構はないで置きませう、と言つては、勇ちやんを異端者扱ひにする様でいけないしと思つて、またみんなと一緒に行動させる様にしやうと宗旨換へをした。

お附添の方は、勇ちやんの、この皆と行動を共にしないと云ふ事を氣にせられてゐる様子がちら〳〵見られるので、この事のあつた翌日、幼稚園での勇ちやんの様子を、逐一お話した。御家庭では、勇ちやんのしつこいのは、人を可愛がる餘りだとか、人と一緒に行動しないのは、自分に忠實に生きるからだとか云ふ理窟は一切なしに、お氣の毒な程素直に受け入れられて、

「皆さんとご一緒にしないのは、それはいけない」と仰言つて、家中でもつてよく話して聞かせ、もし皆さんと一緒

に出來ない樣なら、幼稚園に行くのは止しませう、と言はれたとか、すると勇ちやんはどうしても幼稚園に行き度いので、之からは決してしないと約束をしたと云ふ事である。こんなにみんなにいぢめられても、そんなに幼稚園に來たいのかと思ふと、私はほろりとした。そしてどうかして、今までの間に他の子供の腦裡に植ゑつけられた、勇ちやんへの評價と云つた樣のものを打破すべく努力しなければならないと思つた。

この翌日、勇ちやんは別人かと思ふ程、皆と一緒には入つて來てお話も聞けば仕事もする、遊戯もする。ブー〳〵と云ふ頓狂な聲はこの日は聞えなかつた。その翌日は少し緩んで、凡ての行動がいくらか前の樣子にもどり氣味であつた。その翌日はもつとゆるんだ、でもその都度注意すると、思出した、と云ふ樣な表情をして止めるのである。

教育と言ふ事は、學校と家庭が協力してやれば效果が現はれるものである、と云ふ、世の中には珍腐な筈の事柄が、私には、今新しい生きた事實として迫つてゐる。こうして家庭と學校とが一致協力して、たしなめつゝ習慣性にまで導けば、かなりの訓練效果は揚げられるものである事を、この頃、この他の、二三の出來事でも確信づけられて居る。

―― 十二年七月 ――

（七十九頁より）

夜のうちに汚いものを踏んづけたり、その上に寢ころがつたりして汚れてゐるからです。それから朝ご飯をやります。夜も點呼がすんで寢る前に、も一度厩に行つてやります。かうして騎兵の兵隊さんの一日は、お馬と一緒に起き、お馬と一緒に暮らす一日なのです。かうしてしよつちゆう一緒に居て、仲好しの友達になつてゐてこそ、戰場へ出征して人と馬と一體となつて活動することが出來るのです。

この次はもつと〳〵面白いいろ〳〵な馬のお話して上げませう。